

(様式第1号)

令和元年度第1回文化推進審議会 会議録

日 時	令和元年8月1日(木) 18:00~20:00
場 所	市役所北館4階教育委員会室
出席者	会 長 藤野 一夫 委 員 加藤 義夫 委 員 岡 登志子 委 員 小石 かつら 委 員 桑田 敬司 委 員 佐谷 記世 委 員 横山 宗助 委 員 田中 徹
欠席者	委 員 平井 章一
事務局	川原企画部長, 奥村政策推進課長, 竹内政策推進課主査, 濱口政策推進課主査, 西村政策推進課員
関係課	茶嶋生涯学習課長, 石田生涯学習課員, 森山生涯学習課員
会議の公開	■ 公 開
傍聴者数	1 人

1 会議次第

- (1) 開会及び委嘱式
- (2) 議題1 アシヤアートプロジェクト(AAP)の実績報告について
議題2 令和元年度芦屋市文化推進基本計画評価報告書について

2 提出資料

- 資料1 平成30年度アシヤアートプロジェクト報告書
- 資料2 令和元年度文化推進基本計画評価報告書

3 審議経過

- (1) 開会

(2) 議題1 平成30年度アシアアートプロジェクト報告書

濱口主査：(概要説明)

西村課員：(資料1説明)

藤野会長：ご説明ありがとうございました。それでは、このアシアアートプロジェクト（以下、AAP）の実行委員長である岡委員から何か補足はありますか。

岡委員：2年前にこの審議会で文化推進審議会委員として芦屋の文化についてどう思われるかと聞かれた際に、世界においては「具体」が非常に重要な美術の流れでありまして、海外の方からは、「具体」イコール芦屋とされているのにもかかわらず、市民の方があまり御存じでないという現状を危惧していることをお伝えしました。そういったきっかけで、今回AAPを開催しましたが、参加者のアンケート結果からは、4割程度の方は「具体」の名前を知らない、また、知っていても活動内容までは知らなかったという結果があります。それは、知る状況になっていなかったというのが問題だと思いました。

その要因を、プロジェクトをやっていく中で考えていたのですが、理由の1つとして、「具体」美術というものが、何か人々の生活の中から遠い存在になっていったのではないかと思います。言いかえれば、アートとか文化は何か特別なもので、自分たちとは少し離れたもの、時間やお金に余裕のある方だけが楽しむものではないのかという印象を受けておられて、なかなか浸透しなかったのではないかと感じました。

市民へ浸透させていくには、「具体」に限らず、アートや文化とは本当は何なのか、社会においてどんな役割を担うのかを考えていかなければいけないのではないかと思います。同時に、この文化推進審議会においても、議論していただきたいなど実感しました。

また、今回プロジェクトを実践していく中で官民連携に取り組めたことが非常に大事だと感じました。今後においては、官はアート、文化に関する中長期的なビジョンやポリシーをつくり、予算を確保していただき、民は、英知を結集して市のビジョンやポリシーの実現に努力・協力していく、あるいは、市側では手の届きにくい点などが、官民一体となって取り組んでいくことで、さらに充実した取組みができるのではないかと感じました。そういう状況の中で初めて、この文化資産を正確に伝えることができ、そして、広めていけるのではないかと思います。まだまだ微力ですが、AAPの活動を地道に続けていきたいと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。

藤野会長：はい、ありがとうございます。私も実行委員の末席に名前だけ入れていただいて、全然何も活動できてなくて申し訳ないと思ってきました。ただ、端から見て感じたことですが、延べ433名という参加者を少ないと思われるかもしれませんが、例えばコンサートを企画するときに、定員300人のコンサートで参加費500円徴収しても、全体で60万円ぐらいかかってしまいます。

それで、今こういうアートプロジェクトが全国で展開して、ちょうど「瀬戸内国際芸術祭」が花盛りですが、昨年、一昨年でも、「奥能登国際芸術祭」「北アルプス国際芸術祭」などが開催されました。それらのプロジェクトを見ると、費用対効果というところから見ると結構厳しい部分もあります。有名な方や某企画会社をお願いされているのですが、費用対効果を計算したら、1人1万円ぐらいかかっているのです。行政主導でやっているアートプロジェクトで、観光客に来てもらいたいとい

う思いはありますが、実際のところは、例えば1～2億円の予算をかけても1万人いけばいいという数字が出ています。今回のAAPで考えると、費用対効果で1人1千円ぐらいとコストパフォーマンスがいいです。

なぜできたかを端から見て考えてのですが、1つは社会関係資本として、この活動に関係した人たちは、連鎖反応的に次から次へとすごい方たちがつながっていったのが大きな特徴かと思いました。文化資源“Cultural resources”といいますが、文化財のような物だけではなくて、やはり人のつながりはすごく重要だと思いました。信頼関係に基づいた人のつながりが重要で、それが社会関係資本ということだと思います。この活動を見ていると、市民の文化活動が何か市民社会を本当に作っていくのだという実感が持てたなと思っています。

あと、基本計画で3つの重点項目があって、2番目は「未来を切り拓く子どもたちへ向けた文化政策の推進」、3番目は「芦屋文化を生かした戦略的なまちづくり」というのが掲げられています。今回のAAPの実績と重ね合わせると、特に重点項目の2番目は確実に実現しつつあるかと思っています。それから、この計画を策定した際には「芦屋文化を生かした戦略的なまちづくり」の中に、「具体」というのは、イメージとして無かったのではないかと思います。やはり、「具体」というのは芦屋にとっては確実に文化資源になっていると思います。

昨日、吹田市の文化審議会での計画見直しの話のなかで、市の伝統文化や文化財を活かすという話があり、その伝統文化のなかで、一番シンボリックなのは太陽の塔だという話でした。ただ、この伝統文化や文化財という規定で見たときに、太陽の塔は約50年しか経過していないので伝統文化とは言えないという話だったので、もし文化資源“Cultural resources”という概念で広げていくと、確実に太陽の塔はレガシーになっているわけですから、そこに着目して吹田の文化を再発見することや、次の世代につなげていくということもできるわけですね。それと同じことが、「具体」がまさにこの地域でやってきたということなので、やはりこの基本計画の中でも「具体」がやってきたこと、それからそのインスピレーションを受けて発展していくということは、盛り込まれてしかるべきではと思いました。

加藤委員：先ほどの費用対効果の話で、プロとしてこのような委託事業を、愛知県、大阪府、大阪市などで仕事をしてきましたが、よくこの予算規模でできたなと思いました。人的ネットワークをフルに活用されて、どんどん想いが増えて、本数を重ねて、ホップ・ステップ・ジャンプという形で広められたという、そういう感想を私自身は持ったというところがあります。

桑田委員：私は前回、前期2年間、委員をしていましたが、このAAPには関わっていないとか、実行委員に名前も載っていない立場ですので、何をやってたかというのを知らない立場です。内部でかかった費用やゲスト・講師の方などを、この資料で全容が見えたという形です。

実行委員の方でやっていただくものに対して、この審議会はどういう位置づけなのかと思いました。開催する事業に対して審議会の場で意見を問われれば、私も発言の機会がありましたが、実行委員にも入っておらず、広報などでも案内を見る機会が少なかったのです。前回の審議会のメンバー全員が実行委員に入って、審議会として方向を決定づけという形であれば、私も参画できたのですが、そこがちょっと残念ではあったかなと思います。あと、私の立場が商工会から参加していますので、市内店舗へ広報の協力もお願いできたかと思っています。

そのため、若干厳しいことを言いますが、本来のこの計画に沿って、市民レベル

で文化を身近に発信する、体感するような文化施策に有効となるように、子どものために、チラシは何枚印刷されて、どこに配られたのでしょうか。例えば、高校生対象の回もありますが、市内の高校や生徒全員に配りましたか。高校生対象の事業で、定員 15 名に対し参加者が 20 人いたことは、とても良いことだと思いますが、対象者全員に配付できているのかと思ってしまいます。資料には付いていませんが、数字などは出るでしょうか。

濱口主査：市内の高校の全生徒には配布できておりませんが、学校教育課と関係のある高校の美術部などに配布いただけるよう依頼いたしました。実行委員会と市で、それ以外の市内の高校にも配布しております。

桑田委員：細かい数字になってきますので、全て把握して審議しないといけないわけではないですが、トータルの費用、コストバランスに関わると思うので、プロがやることを考えたら、低予算で非常にいい効果を与えたというのも 1 つの側面です。ただ、私が商売人なものですから、もし自分でこういうイベントを開催したら、お金かからずに広報する方法や、一般市民レベルの人も協力できるイベントをしたら、よりよく広がったのではないかと思います。この委託事業は本年度も継続事業でされるのですか。

奥村課長：今年度は予定しておりません。

桑田委員：また次回開催される際は、もう一つ輪を広げていきませんか。もっと市内の様々な団体と連携して広げていけば、よりいいのかなというのが、今回の総括を聞いての個人的な意見でございます。

奥村課長：市からの委託は予定していませんが、実行委員会側で A A P の活動自体は継続されることとなっています。昨年度は、旧宮塚町住宅の改修が終わるという機会を捉えて実施しました。それと、「具体」がどのように市民の中で受けとめられているかを調べるために実施しました。

桑田委員：なるほど。旧宮塚町住宅というポイントがあるので、継続できればいいですけども、今年はヨドコウ迎賓館を中心に行うというのも、方向性としてはおもしろいのかもかもしれませんね。

藤野会長：私、10 年以上この審議会に関わらせていただいて、進行管理や評価はされるのですが、その評価した P D C A のアクションが起こる可能性が今まではありませんでした。そこで、前回、会長を引き受けるに当たって、今まではできなかった実験的なプロジェクトを何かできる余地はないですかということを相談させていただいて、旧宮塚住宅のオープニングの機会を捉えて開催することとなりました。パイロットケースの取組と位置づけていただければいいなと思います。

桑田委員：そのような狙いであれば大成功ですね。

佐谷委員：本当に端から見てのご意見ですが、芦屋市在住で昔から現代美術が好きで、美術博物館が「具体」を研究する方がたくさんいらっしやって、大阪ではなく芦屋が「具体」の資料や研究の本拠地という印象があったのですが、今は大阪に新しい美術館ができて、アーカイブも全部大阪に行ってしまう、芦屋がちょっと抜け殻のような感じになっている印象があります、市民として。芦屋市として「具体」をどういうふうにしていくのか、世界的に「具体」という名前は本当によく知られていて、文化資源として芦屋が誇れるものだと私も思っております。

ニューヨークとかで華々しく「具体」の展覧会があったことや、オークションで美術品の「具体」の絵画の値段がどんどん上がって、ヨーロッパのディーラーやコレクターも購入されるなどの動きもあり、「具体」がメジャーになってきていました

ので、芦屋はこれから「具体」をどうしていくのかと私は疑問に思っていました。昨年はこのチラシを拝見して、これからも継続されるのかと思ったら、来年は違う形でされるということで、これから「具体」を芦屋市はどういうふうに扱って、どう大事にしていくのかなという気持ちはあります。

岡委員：戦後、今の芦屋公園で具体の野外展覧会があり、美術の歴史から考えて、「具体」というのは、戦後、その現代美術の中で歴史的に大きな役割を世界的にもしているということが非常に大きいのですが、ほとんど芦屋市民の方は御存じないという状況かと思えます。

それは、やはり文化は一体どうしていくべきかというビジョンが欠けていたのではないかと思えます。

藤野会長：私もそのあたりが腑に落ちないところがあって、芦屋の美術博物館はコレクションとか研究の面などですばらしいことをやってきた。しかし、研究者のための財産としてなっているようなところを感じます。もちろん、アウトリーチなど色々なさっているかと思えますが、もう過去の文化資源になったものを大事に保存して研究するというのではなくて、活動体そのものを開いて発展していくものも重要かと思えます。

岡委員：アートに関心を持ってらっしゃる方だけではなく、そうじゃない方にも私たちはこの活動を広げたいと思い、高校生の方や保育所の方にも、チラシを配布しました。そういう意味で、いろいろな方にアートというものを広げたいということを大きな趣旨として活動してきました。

加藤委員：精神が自由であることを具体的に表明するという1つの言霊みたいなところに触れられて、「具体」という歴史的な部分というのもこだわりはあったと思うのですが、世界の方々は知っているのに、芦屋市にお住まいの皆さんが「具体」を知らないのが何故かという疑問点もあります。それよりも、現在に「具体」の精神というものを生かせないかということで、精神は自由であるということの素晴らしさを伝えなかったということで、「具体」という形をとって今回のイベントが開催されていたと思えます。

岡委員：そうですね。理念というものを大事に伝えていきたいと思っています。

佐谷委員：そのお話でよくわかりました。これは自由な精神を表現する「具体」の理念を伝え、それでどんどん広がっていかれるということですね。

岡委員：そうですね。芦屋がそういう場所であり得れば良いなと思えます。

横山委員：岡委員のおっしゃっていた、いろんな人にアートを広めていきたいというのも、すごく素晴らしいことだと思いました。特に、会長のおっしゃっていたPDCAサイクルの中の最後のアクションが行われない審議会が多いという話が、私もすごく共感しています。いろいろな審議会に出させていただくのですが、結局、話し合っただけで終わりということで、パイロット版で、実験的でも何かしらの形になったというのはすごくよかったなと思えます。

ただ、デザイナー的視点で見ると、桑田委員と同じ意見で、「具体」アートがすごく前面に出すぎていて、チラシや広報を見ても、高校生でも一般の高校生とか、一般の保育園の子が行きたいと思うようなデザインではなかったと思えます。そのような仕掛けがなかったかなということなので、顧客目線というところがやはりもう少しデザインが必要かと思いました。

あと、私が余り美術博物館の知識がないまま話してしまっていますが、「つくる場」などは、かなり一般目線に落ちており、フリーマーケットの同時開催や、チラシなん

かも保育園のお母さんたちが結構共感できるようなアーティスト、デザイナーを起用しています。「つくる場」を訪れたついでに、同時に開催されている美術展を見て帰るみたいな、きれいな動線ができていて、これは先ほど行政からの総括にもありましたけど、「具体」ばかり推して来てもらうより、何か違う仕掛けがあって、そのついでに来てもらうという流れは、できているかと思います。

また、アートプロジェクトなどのKPI設定を審議すべきだと思います。KPI設定は、来場者数が一番測りやすいかと思いますが、延べ人数で集計されるケースが多いです、やはり延べで数えてしまうと、何かつくられた数字になってしまっていて、今回のAAPも延べ人数で集計されていますが、同じ人が何回も参加して、身内が結構多かったのではないかと思います。それを悪いと言っているわけではなく、KPIを人数にしてしまうと、人数稼ぎになるとよくないので、何かKPIを別のことに設定しないと、変な方向に進んでしまうのではないかと思います。

藤野会長：KPIはその数字でしか今のところは示せないの、帳尻合わせみたいな、不正もたくさん起きてきますよね。私はもうKPIは最初から無いほうが良いという考え方ですが、ただ、行政の側あるいは私たちが何をもって評価するかという点が、なかなか難しく個人差も出てくるので、皆さんと議論していきたいなと思っています。

小石委員：違う視点からの一意見になりますが、私は前回の2年間から初めてこちらの委員をさせていただいて、今回で5回目の審議会ですが、この場は飛躍的に議論が行われており面白くなっています。これまで私が経験した4回の審議会は、報告を聞いて終わりでした。私の場合は芦屋市民ではなくて、遠くから来ているのですが、資料を確認して、一言ずつ意見を言って終わる。こういう何か会議を開くことが目的であるのだなと感じていました。このAAPというアクションを起こしたらどうかというお話を聞いて、何かが動いたという結果として、こういう活発な議論がなされる審議会は、すごく大きな一歩だと思います。

藤野会長：今回、急なこともあって桑田委員には参加していただけなかったのです。本当、残念な思いがあって、本当に桑田委員にはまさに文化資源がたくさんあるわけですから、もう一度、何かこの阪神間が今までやってきた意味、そしてこれから築いていかなくてはいけない方向性みたいなものについて写真を通して、何かプロジェクトができたらしつとも考えていました。だから今回、「具体」というところから取っかかりを作りましたが、次はぜひ桑田委員の資源を生かすような形で出来ればと思っています。

桑田委員：いろいろな文化が芦屋にはあります。「具体」、写真、音楽、文学など、本当に狭いまちにいろんな種類の文化が密集しています。実際、私の曾祖父も「具体」が芦屋公園で作品を作っているところを写真で撮っています。私は自分の家系なので知っていますが、一般市民の方が知る機会が少なく、震災など大きく時代が動いたこともあったので、本当に文化とか芸術って二の次にされがちなのです。やはり、衣食住の生活基盤がまず大事ですので、復興した後に力を入れるものなので、本当にすごく労力が要ると思います。

ただ、やはり行政と民間とが手をとって、日常に文化を感じるものがあれば、それは行政としても本当に一歩も二歩も前進した結果になると思います。それと、今は「具体」と建築がツートップで、芦屋ではビッグネームになっており、この柱は文化を訴求するうえで力がありますが、写真や音楽や文学もあって、全体で芦屋の文化芸術というものが発信できればという考えもあります。

藤野会長：写真、音楽が加わるなら、アイデアや人的ネットワークはあるので、それを実施主体に変えていくNPOや実行委員会というのを、こことは別組織につくれないなと思います。

加藤委員：あと、芦屋神社さん中心にアートと音楽を発信するプロジェクトを開かれる予定ということですが、そこに予算がついたらいいなと思いますが。

岡委員：そうですね、先ほどの話でも、衣食住が最優先で次に文化となりがちですが、精神が自由という「具体」の残された理念を考えると、文化も衣食住と同じ、人間が生きる一番ベースにひっかかっているものだと思います。文化というものが一体社会において何なのかということを見極めなければ、こういったつながりが出てこない。衣食住の根底に、人間が生きるということとアートには深くつながりがあると思うので、そういった本質を市としてどういうビジョンで、今後つながっていくのかということが非常に重要なことだと思っています。私たちの心で感じるものというのが文化であり、芸術だと思います。言葉に変えるのは難しいですが、何かそういう生命力みたいなものを人間は肌で感じて生きているものであり、芸術とは、そういった次元のところにあるものではないかと思っています。

それを考えると、衣食住がまず優先され予算などでも防災とかが優先されると思いますが、その根底にはやはりアートというものの意義というか、役割というのが存在しているのではないかというのを、私は議論していきたいと思っています。

桑田委員：とてもいいお話ですね。新しい市長に聞いてほしいですね。我々もこれだけ議論して、衣食住の根本にあるのだから、芦屋市としても力を入れていただきたいなという想いです。

藤野会長：まだ市長は文化に対してどのような方針を持たれているか分かりませんが、ぜひお話する機会があればと思います。

藤野会長：共生社会や社会包摂が今トレンドになっていますが、そこだけ取り出すほうがおかしいと思います。オリ・パラだから共生社会や社会包摂が必要だという変な展開かと思っています。でも、衣食住のさらにベースに人間は何かわからないけど感じる力があって、その感じる力で人と人は個体を超えてつながっているという、そこから出発すれば、衣食住と同じように必要不可欠なのがアート、芸術じゃないかなと思います。

岡委員：やはり、戦後に「具体」が生まれたというのは偶然ではなく、戦争を体験した人たちが、その生活の場において生きる大切さを感じ取って、必然的に生まれたものだと思います。それは写真、ハナヤ勘兵衛さんもそうだと思います。そこで発祥したのが芦屋だったというのが大きな遺産だと思います。

藤野会長：そうですね。1人でも多くの人に何か、そういったものをもう一度感じ取ってもらいたいなと思います。そういうセンサーみたいな仕掛けをつくれるといいですね。

(2) 議題2 令和元年度芦屋市文化推進基本計画評価報告書について

濱口主査：(資料2説明)

藤野会長：以前と比べると、簡易化、簡略化されていますね。新しい委員の方もいらっしゃるのですが、本当に何か素朴な疑問でもいいので、ぜひご意見を出してください。

桑田委員：資料2の最終ページにある指標の達成状況で、「芦屋の伝統や文化に関する講演会などの参加者数」ですが、27年度時点が330人で、現状時2,000人を超えているの

はどのような要因でしょうか。

濱口主査：この数値は30年度の実績になりますが、ヨドコウのシンポジウムをルナ・ホールで開催した影響が大きく、このような実績数値となっています。

桑田委員：27年度から5年間のトータルではなく、令和2年度単年度だけで390人を目指しているということですね。

濱口主査：そのようになります。

横山委員：たくさんイベントも行われていて、アートに関することもすごくよいプロジェクトが行われていて、芦屋に住んでいて良かったと率直に思いました。しかし、これから当然税収も減っていきますし、これをずっと続けるのか、これを全部指定管理とか委託事業でやっていくのというのは、単純に無理だと思いますので、アート、文化だけでも、そこに携わる人も自分達で稼げる力というか、集客できて、ちゃんと自立できるようなプロジェクトにしていく必要があるかと思います。いつまでも委託事業というわけにはいかないと思うので、ソーシャルビジネス、コミュニティービジネスとかという言葉もありますけども、何かそういったアート、文化も稼げるような方向に考えていけるようになればと思います。もし、予算をつけるなら、そういった稼げるようなプロジェクトを中間支援できる仕組みに予算をつけたほうが、いいのではないかと思います。

藤野会長：旧宮塚住宅はそのような考え方でやっているのですよね。最終的には自分たちで稼ぎ上げられるような準備段階として今支援しているということですね。

奥村課長：旧宮塚町住宅は、事業を始めたばかりのところなど、スタートアップ支援としています。

藤野会長：管轄はこの審議会の中ではないですね。

奥村課長：そうですね、女性活躍の事業です。政策推進課も関連はございますが、直接の評価対象ではないかと思います。ただし、イベントを開催されるということはあるかと思しますので、そういった内容をご報告できるかと思えます。旧宮塚町住宅の入居者の方には、地域活性化につながることに協力してもらうことを条件として入っていただいていますので、地域を巻き込んで何かするような動きが今後出てくる可能性は非常に高いと思います。

佐谷委員：先ほど横山さんがおっしゃったことに関しては、ホール事業や展覧会をしたりする中で、収益を上げられるものと、収益は上がらないが皆さんに知っていただくためにやらないといけないものがあって、どちらも大事だと思います。歴史的には有名だが、今は少し忘れ去られている人たちの展覧会や作曲家のコンサートも、余り集客は期待できなくても、継続しないと完全に忘れ去られてしまうというのがあります。

例えば、9月に貴志康一さんの生誕100周年で、ルナ・ホールで交響曲「仏陀」という滅多に演奏されない曲の演奏会を企画しています。予算が少ない中で、社会人オーケストラに演奏していただき、また、関西出身の32歳の指揮者をお願いできました。

ただ私は、ルナ・ホールが企画しなかったら、誰がするのかと感じています。貴志康一さんは、芦屋でとても大事な人で、お父さんが近代指揮者の貴志彌右衛門さんで、ハナヤ勘兵衛さんや中山岩太さんとも交流がある有名な方です。そういうことも皆さんに知っていただきたくて、無料で展覧会をやります。貴志康一記念室がある甲南学園さんから資料をお借りします。また、貴志康一さんが映画を撮っていたので、そういったことも皆さんに知ってもらわないといけないと思っています。

集客などは全然未知数ですが、収益がある企画も、赤字となってしまう企画も両方やらないとやはりいけないと思います。

藤野会長：例えば、横山さんに例示いただいた収益を上げられそうなコミュニティービジネス的な展開というのは、芦屋市としては、古民家や文化財を活用して、例えば観光に結びつけるなどの動きは余りないように思っていて、どちらかといえば、住民達が比較的質の高い生活ができることを重視されているというように感じていました。

奥村課長：それは、どちらかといえば、まだ観光に余力を入れられていないということでしょうか。

藤野会長：この文化推進基本計画がすごく幅が広く、芸術文化に特化したわけではなく、例えば景観というのが大きな部分を占めていますよね。文化財や食文化も入っていて、逆に言うと、焦点がぼけてしまうところがあり、この3つの重点取組項目でいいのかと疑問に思えてきてしまっています。特に、重点取組項目の3番目は、どこに戦略性があるのかよく分からないです。戦略的に金儲けせよというのは僕の主張じゃないですが、地域社会の持続可能な発展を考えたときに、非営利でもやるべき企画内容に、稼げる企画内容での儲け分をうまく循環させる仕組みを作るべきと思いますが、その戦略的な仕組みが何かよくイメージできないですよ。

奥村課長：まず、この文化の計画の対象範囲が広いという点ですが、文化というものがいろんなものを内包しているので、どうしてもそうなると考えています。それと、特徴としては、やはり、精神的に豊かに暮らせるという状況が芦屋の文化だと計画の中に位置づけています。

戦略的かというと、例えば今回であれば、旧宮塚町住宅をリニューアルしまして、芦屋での非常に暮らしやすいまちの感覚をわかっただけのようなお店を起点にして、エリア全体で盛り上げようとしています。同時に市民参画センターを改装し、比較的年齢層の若い方々が集まる場所として、自主的な活動が生まれるような土壌や雰囲気を作りました。そういう意味では戦略的と我々としては思っています。また、商工会にコワーキングスペースを作り、大きく事業を展開するというよりも、自分の考えやポリシー、得意なことを活かしてお仕事を始めていこうとされている方も支援しようとしています。

横山委員：少し補足になりますが、本職では三宮でコワーキングスペースを運営しております。そこには100人ぐらいの起業家の人たちがいて、その人たちが新しく何か収益事業を起こしていこうというのを考える場所です。先ほどアートに対して、収益事業の側面が必要という意見を言わせていただきましたが、その100人の人達はすごく収益事業に特化して色々考えているので、アートと文化には収益事業という側面がやや少ないなと思います。意見を言わせていただきました。

私、非営利活動が専門ですが、非営利活動する上でお金が入ってくるのが3つあると言われてます。1個目は、委託事業や補助事業のような、行政の税金が入ってくるということ。2個目は、収益事業。3個目が、クラウドファンディングなど含めた寄附事業。この3つの収入の方法があって、それをバランスよくやっていると、委託事業頼りだと打ち切られてしまったら、アートやコンサートは開けなくなりますし、全部をバランスよく考えていかないと、何かのきっかけで完全に終わってしまうので、これは絶対に必要なことだから税金頼りですと言い切ってしまうのは少し怖いかなと思います。

藤野会長：岡委員は、非営利的な活動をたくさんされていると思いますが、特に、コンテン

ポラリーアートとかダンスの分野は、収益性を考えると難しい部分がありますよね。助成金を頼るにしても、2分の1助成でも自分の首を締めるぐらい大変で、僕もあるコンテンポラリーダンスのNPOの理事をやっていますが、NPOの精神が本当に生きてこない社会になってきて、つまり助成事業でも回らないので、委託事業だけしかやらないとなっています。組織として成り立つには委託しかやらないとなったら、NPOの意味がないかと思います。自発的に自分たちで新しい制度設計をして実験をするという、NPOのまさに「具体」の精神みたいな自由がないNPOにだんだんなっています。だから、福祉、医療、教育関係など、NPOでも比較的収益が上げられそうな部分があると同時に、現代アートの分野では、ほぼ絶望的な現状が日本にはあります。ここを本当に行政がきっちり見ていかないと、日本は世界の中でほとんど存在感のない国になってしまいます。

岡委員：アートというものに対して、結局、行政は何をすべきかを考える必要があるかと思います。アートとは何かというのを、行政がビジョンとして持っていて、そこで予算を取っていただくということがどうしても必要になってくる。それは、内容にもよると思いますが、アートだから全てフリーでとか、助成金もらって当たり前とかではなくて、アートの種類で例えばコンテンポラリーとかは、行政がしっかりと社会においてどういったものを位置づけた上でやっていってもらえることが大事な事かかと思っています。

小石委員：それに続けてですが、先ほど採算がとれるものと、採算がとれなくてもやらなければならないものというお話があったと思いますが、今の岡さんの話を続けていくと、この報告書で1行目にある「ルナ・ホールにおいて世界的指揮者である佐渡裕氏を招いたコンサートの開催」は、ルナ・ホールの事業として、公的予算でやるにはもったいないのではないかと思います。

佐谷委員：佐渡氏が芦屋市のためにとやっています。だから、入場料も通常よりかなり低価格にして、幅広く色々な客に来ていただきたかったのですが、ホールが660席というキャパシティなので、あっという間に3時間で売り切れてしまっていて、また1年後、2年後にお願いをしたいとずっと申し入れています。

小石委員：ありがとうございます。いえ、安い高いというよりはもったいないなと思っていて、民間でできるものよりは、やはり公的なもので委託でしかできないものにそれこそたくさんお金が欲しいです。貴志康一さんの企画も、例えばプロのオーケストラでしっかりした指揮者でやることも一つではないでしょうか。

佐谷委員：例えば、プロのオーケストラでしっかりした指揮者でやると高い費用が必要ですが、佐渡裕さんの場合は芦屋のためにとという思いでやっています。

小石委員：貴志康一さんの企画を佐渡さんが指揮振れば理想的かと思ったのですが。現実的にどうかということについては、重々承知の上での発言ではありますが。

佐谷委員：そうですね、今後ですね。

小石委員：架空の発言でという前提でお聞きいただきたいのですが、なぜそういうところにお金がおりにないのかと思います。

佐谷委員：そうですね。

小石委員：なぜそういうところで色々我慢しないといけないのかは根本的な問題として、もっと理想的なところにお金を入れていけるような場にこの審議会があるべきでなければならないかと思いました。現実的に可か不可かという問題を抜きにして。

佐谷委員：おっしゃっていることはよく分かります。多分それは構造的な問題になってしまうので。業務受託させているところに、どう収益が上がったか、構造的な問題なの

で。

藤野会長：すごく大切なところかと思えます。私たちがこの十何年、審議会でやってきたのは、行政の側でもって評価された内容について説明を聞いて、追認をする機関になっています。しかし、アーツカウンシルなど、芸術評議会とか審議会であったならば、予算の配分など何を重点的にするかまで決める場になります。アーツカウンシルというのは本来、時代の変化にあわせて、事業や方向性の評価などを決める場が審議会のはずですが、どうも日本の審議会は一般的に追認で、行政が事務作業でやったことを追認する場で市民合意されていますという理由づけの場になってしまっています。だから、貴志康一というのが芦屋にとって「具体」と同じようかけがえのない文化資源であると位置づけていたら、市の全体の文化政策の中にその重要性を位置づけて特別配分するというのも決められる場で本来はあるべきだと思います。そうすれば、審議会はもっと活発化するし、もちろん色々な意見が出てくると思いますが、みんなで最終的に合意をさせていけばいいので。

予算配分とか、市の事業の重点的なことまでこちらで決定する権利があるのであれば、それは非常にフレキシブルな審議会になると思いますが、この審議会はこういう位置づけでしたでしょうか。

奥村課長：審議会は計画の進行管理が一番主で、文化の振興に関することについての意見をお聞きする場です。

藤野会長：意見は述べますが、例えば予算をチェックするとか、そういう機能はないのでしょうか。

奥村課長：予算を決める機能まではこの審議会にはありませんが、参考意見としてここに重点を置くべきであるというような意見はいただけるとは思います。

藤野会長：そうですね。例えば、ルナ・ホールさんや指定管理をなさっている方も、何か自分たちのやりたいプロジェクトとか、夢を語ってもらえたら、こちらが応援してみたいなこともできると思いますが、そういう場にはなかなかないですね。つまり、実施機関として文化振興財団はないが、指定管理をいろんな業者が受けており、また、この審議会は、市の文化政策全体の進行管理、評価を行う場ですね。しかし、間接的にこういう事業評価は見ていますが、実際にその現場でプロデュースをされて、マネジメントをされている方の生の声ってなかなか聞けないですね。

奥村課長：計画内の「文化」は、文化芸術のみではなく、観光的な色合いのもの、人権的施策、福祉的な施策など、色々なものを包含しており、何かだけを「文化」とするのは非常に難しいです。

藤野会長：そこが幅広にとったとき、総花的になってしまう所かと思えます。ただ、本当は分野を横断するという、横串にするところから発揮できる力というものもあると思います。

奥村課長：非常に広い分野で事業を実施しておりますので、抜粋して我々のほうでご報告させてもらっているところです。

桑田委員：この審議会が、計画や報告書を見て追認する場であれば、それは構わないと思います。また、やりたい夢を別に語ってもらってもいいし、意見として出すのもいいと思いますが、実際にやっている事業が本当に芦屋の文化芸術に関係しているものなのかを見ないといけないと思います。例えば、子供の読み聞かせ、大人の読み聞かせとありますが、読み聞かせる題材が谷崎、高浜虚子、富田碎花など、芦屋に係のある読み聞かせなら追認したいと思いますが、ただ広い意味で文化だから何でもいい、図書館を使ってもらったら何でもいいというのであれば、待ったをかけた

いと思います。

やはりいろんな文化、幅広い芸術ですけども、第一に、市として、行政として、自分のところの文化資源を把握して、それに特化した事業をプッシュしていく、そういったことをできているかどうかを我々がチェックするというのが大事なのかと思います。

前回も大変分厚い資料を、きちんと事前に確認してきましたけども、本当に芦屋の文化施策として押していくうえで、給食はよかったと思います。給食の本も出して、芦屋の給食を食べた人間としては良かったと思います。これは市として文化施策としてプラスの方向に、市民にもわかりやすいレベルでしていると思います。そういうパターンをより精査して行って、事業仕分けとまでは言いませんが、どこに重きを置くか、あるいは今年から2年間は建築物に重きを置くなど、そういう方向づけのためにこの計画、報告書を見て我々が思うことというのが何となく意見できればいいのかと思います。

藤野会長：桑田委員がおっしゃることは本当にもっともで、一番根幹にかかわる大きな問題は何かというと、基本計画ではアクションプランを作っていないですよ。アクションプランは、大体3年単位ぐらいで、1年目にこういうことやります、2年目にここまで達成します、3年目にという、その3段階でもって、ある目標に向けて本当に実施していくプランになります。アクションプランをやれば、本当にKPIもはっきりしてきますが、この段階だと本当に抽象論ですから、これはこれにやりましたって分類はしやすいのですが、今の時代を読んで、そして芦屋の資源を見据えて、この3年間でここを見える化、重点化するみたいなアクションのための計画が無いです。だから、この審議会でアクションプランを作るのかどうか、これは市長レベルでの決断になってくるので、それを予算化しないと無理ですよ。今の恒常的な予算の中でメリハリをつけるのも一つですが、もし重点化するのであれば、予算の議会承認までもらわないといけないので、アクションプランまで踏み込んで、この審議会で作るのかどうかですよ。

奥村課長：総合計画の下に、実施計画は全事業で作っていますので、そういう意味では文化に関わる事業も、その中に含まれています。

藤野会長：総合計画の下に実施計画があるのです。ただ、その実施計画で文化に分類されるものがどういうものかというのは、私たち見えてないですよ。

奥村課長：我々の考え方としましては、文化だけの何か、それから福祉だけの何かというのではなくて、福祉の事業をする中に文化的な考え方を入れながら実施する方針にしていますので、完全に分離するのなかなか難しいというところがあります。

藤野会長：その方向も、昔から言われている行政の文化として、総括してすごく重要な方向なのですが、やはり、ここでしかできないアートとか文化芸術というのを押し出すときには、今のようなものでは本当に特徴がなくなってしまいます。だから、その特化して押し出すことを戦略的にやっている自治体も幾つかはあります。非常に危機感を持っている自治体ではあります。

だから、この審議会も新たな任期が始まったばかりですから、次に向けてそういうアクションプランみたいなものや年度計画を作って、実施に向けてやっていくのかどうかの検討が必要だと思います。ただ、やはりそれは新しい市長がどうお考えかをお伺いできればと思います。

それでは本日の議題はここまでですが、事務局から何かありますでしょうか。

奥村課長：特にございません。本日は暑い中、お越しいただきましてありがとうございます。

た。また、活発な議論もいただきましてありがとうございました。
藤野会長：それでは以上で閉会となります。ありがとうございました。

(閉会)